

子どもの心身の発達に 関係性はいかなる影響を及ぼすか？

遠藤 利彦
(東京大学・大学院教育学研究科)

1

子どもの虹情報研修センター
(日本虐待・思春期問題研修センター)
課題研究

『乳児院養育の可能性と課題を探る』 —現代発達科学的視座からの検証—

2

- 乳児院入所児の実際
→約60%に心身リスク / 約35%に被虐待歴
- 入所時点から既に、標準的な定型環境で成育する子どもときわめて大きな発達差
- 大半の乳児院が専門的ケアを通して入所児の心身発達の支援・改善に努めている
- しかし、社会全般に、乳児院で成育する子どもの発達上の問題を、乳児院の環境条件の乏しさやケアの質の低さに起因すると誤って認識してしまう傾向があることは否めない

3

- 多くの場合、子どもたちの退所時の発達状態のみをもって、乳児院入所児の育ちの質が安易に判断されてしまうという実態
- 本来、乳児院入所児に対するケアの評価は、個々の子どもが入所時から退所時にかけていかに変化し得たかということに関する正確な評価に基づいてなされるべき
- 乳児院養育の機能・役割や子どもの発達改善に対する現実的な寄与が過小評価されてしまっているという由々しき事態

4

- 乳児院における子どもの育ちの実際を正確に把握し、可視化した上で社会に明示する必要性
- しかし、現状として、子の発達および成育環境等のアセスメントは個々の院によってバラバラ
- 個々の院の独自性を残しつつ、全国共通の標準アセスメント・ツールの開発・施行が必須課題
- 「乳児院におけるアセスメントガイド」(2013)等に依拠しつつ、標準アセスメント票の試案作成
- 効果検証→乳児院の機能の正当な評価
→院環境および関わり方の改善
- 精確情報→子どものその後につなげる

5

● 「特別養子制度」

- 「実質的な親子関係」である必要はあるのか？
- そもそも「実質的な親子関係」とは何か？
- これまでの6歳までなら「実質的な親子関係」の形成が可能という判断の論拠は何だったのか？
- 「実質的な親子関係」が子どもの健全な心身発達やwell-beingを阻害する危険性がある一方で、「実質的な親子関係」ではなくとも、子どもの心身発達や将来展望に資する有益なものになり得るのではないか？
→「実質的な親」より「安心の基地」/「安全な避難所」

6

●「何歳までなら可能か」という問いの答えにくさ

● 発達における「標準的要素」と「個別的要素」

- 平均的環境下での標準的発達を想定した場合、無論、それぞれの発達期に特異な困難性は伴うが、原理的には何歳でも可能。しかし、実質的に制度の対象たる子どもの発達は、多くの場合、標準から逸脱している。発達の個性性をどこまで考慮し得るのか？

● 標準的な発達ライン

- 自他への基本的信頼・自己意識・自己評価・自己制御・心の理論・自伝的記憶・動機性・メタ認知・形式的抽象的認知能力・感情知性・自律性・アイデンティティ・時間的展望・異性愛・・・・

● 個別的な発達ライン

- 遺伝的脆弱性・疾患・障害・生育歴(関係性の歴史)に由来する発達の遅滞・歪曲・修復・・・

- 「標準的要素」のみを根拠とする法的判断は、養親子双方にwell-beingをもたらすか？

7

- 上限の引き上げ法改正がなされる場合には、それと同時並行的に、養親子を、持続的に心理社会的にサポートする公的体制も併せて構築される必要がある。養親子にだけ閉じない、養親を中核とした“allocare”システムの整備・実現が喫緊の課題なのでは？

8

1)乳児期(口唇期)

基本的信頼感／不信 (希望)

- 愛着(親との情緒的絆) 近接欲求・摂食欲求の充足経験の重要性→人間関係の基盤(自己および他者に対する信頼)

2)幼児期前期(肛門期)

自律性／恥・疑 (意志)

- 排泄をめぐる葛藤→トイレット・トレーニング
身体運動の飛躍的向上 探索活動
- 自己意識の成立(他者から見られている自分)
自己主張(第一次反抗期)

9

3)幼児期後期(エディプス期)

自発性／罪悪感 (目標)

- 同性の親との同一化(性役割行動) 超自我(基準・規範意識)
- 「心の理論」→自己や他者の内面・心的状態の理解

4)児童期(潜伏期)

勤勉性／劣等感 (有能感)

- 一時的な心身の安定→社会的に価値あるものへの動機づけ
自己統制と義務感
- タテの関係からヨコの関係へ(ギャング・エイジ)
集団生活・社会的ルールの基礎

10

5)青年期(性器期)

アイデンティティの確立／拡散 (忠誠)

- 第二性徴・性欲動の高まり・心身発達の非同時性→心理的不安定+社会的不安定(境界人)
- 第二次反抗期(親からの情緒的自律性→友人関係の深まり)
- モラトリアム(試行錯誤しつつ危機を乗り越え本当の自分探し)
- 生きてきた(生かされてきた)自己・生きていこうとする自己・社会に認められる自己→三つの自己の統合(アイデンティティ)

6)成人期前期(～35歳)

親密性／孤立 (愛)

- 社会人・家庭人としての現実的生活
- 深い信頼に基づいた特定異性とのパートナーシップ

11

7)成人期後期(35～65歳)

生成継承性／停滞 (世話)

- 社会的責任 次世代の育成
「育てる」を通して「自ら育てられる」
- 中年期の危機(変わりたくないのに変わらないといけない)
- 身体活力の危機・性的能力の危機・対人関係構造の危機・思考の柔軟性の危機
- 空の巣症候群(子離れの課題)
- 老親との関係(役割の逆転・再調整)
- 職業・役割から離れた自分の建て直し
→アイデンティティ再編の課題

12

8) 老年期

統合／絶望

(英知)

- 退職・対人関係の変化・身体機能の衰え・近親者の死に直面
 - 現実に多くの危機を経験することになるが、それがさらなる心理的成熟の契機になる
 - それまでの自分を肯定的側面・否定的側面すべて合わせて統合的に受容する
 - 社会的ネットワークの重要性(互いにサポートを与え与えられる関係の大切さ)
- * 統合性の達成はそれ以前の各段階における達成の度合い、とりわけその前段階の世代継承性の獲得と相対的に高い相関を有する(Hannah et al., 1996)→生涯に亘る漸成的組織化

13

発達の始原なる胎児期

14

- 生涯発達における胎児期の重要な意味
- DOHaD仮説(成人疾病胎児期起源説)
- 胎内環境: 栄養・ホルモンシャワー・テラトゲン...
→胎児発生・成長過程の非定型化
- 2世代間の影響のみならず3世代間の影響も
- 胎内環境は妊婦の心身状態・生活習慣およびその外側の社会文脈的要因に左右される
- (ゲノム・インプリンティング説: 受精時の父親年齢→特定側面の発達リスク)
- 低体重・早産等のハイリスク児は出生後に二次的・三次的にさらなるリスクに巻き込まれやすい

15

- ハイ・リスク児(低出生体重・病氣・障害・可視的差異等)
- ジョイントネスの相対的希薄さが二次的・派生的に招来する種々の発達的問題への配慮
- 「コミュニケーション好き」な外形の乏しさ
(幼児図式・社会的定位性・反応性・情動表出等の弱さ・不快発声など)
→"mind-mindedness"の低誘発性・「わかりにくさ」等
→社会的報酬の得難さ
→養育への動機づけの低下(→不適切な養育)
社会的刺激付与の不足(→二次的発達遅滞・障害)
- ジョイントネスに焦点化した発達支援
→ c.f. 「モニカ」の事例・Fraibergの実践

16

• ジョイントネス (JOINTNESS)

情的に他者と繋合し、互いに感応し合う状態
(≡ 第一次間主観性 [→第二次間主観性])

- 関係性の始原・基盤
- 生涯発達のオーガナイザーとしての役割
- 社会的な脳と心の漸次的構成
- その失調・齟齬が招来する様々な発達事態

17

ジョイントネスを支えるもの

- 他者に感応する子ども: ヒトが発する種々の刺激に特別な感性を備えて生まれる
- 他者を感応させる子ども: 自分の身体の形状そのものやそれが発する種々の刺激を通して他者を感情的に揺さぶる
- 子どもに感応し・子どもを感応させる大人

18

感応する/感応させる子ども

- 幼児図式(「ただでさえかわいい」ことの意味)
身体・顔・動き等の特徴が無条件的な魅力
- 社会的注視(「見つめられる」ことの意味)
社会的知覚の帰結→ヒトへの定位・注視
- 社会的発信(「感情を寄せられる」ことの意味)
感情表出+感情らしき表出→シグナル性
- 社会的同調(「応答される」ことの意味)

19

• 感応する/させる子ども

- いかにも「コミュニケーション好き」な外形
→他者、特に養育者の「錯覚」を誘発する
- 乳児は周囲の他者の関心を引き、過剰に自身の心の状態があると見せかけ、さらに他者から現にそれに応じた関わりを引き出してしまふ
- 大人にもついそれに応じてしまう仕組み
直感的育児+Mind-Mindedness……
- 子どもと大人はうまくかみ合うよう「共進化」
- **ジョイントネス**(互いに感応し合い情動的に繋がる)

20

妊娠期における母親の子ども表象 の個人差と出産後への影響(本島,2012)

- ◆ 妊娠期における母親の子どもについての表象
→母親一人ひとりの**個人的特徴・個人差**が存在



- ✓ 生後1年後においても比較的安定して連続している
cf.妊娠期と生後12ヶ月の母親の表象タイプ
→80%の一致率(Benoit et al., 1997)
- ✓ 生後1歳時の子どものアタッチメントタイプを予測する
cf.妊娠期の母親の表象の質と子のアタッチメントの質
→74%の母子ペアで理論的に想定されるような関連性が見られた(Benoit et al., 1997)他同様知見(Huth-Bocks et al., 2004)

21

妊娠期の母親の語りのタイプ(個人差)

➤ 安定型(Balanced)

子どもについての描写が豊かで鮮明。柔軟で一貫した語り。子どものポジティブな側面のみならず、ネガティブな側面に関しても、バランスよく自由にオープンに言及できる。子どもへの情緒的関与が高く、受容を示す。喜びや自信などのポジティブな感情が強い。

➤ 非関与型(Disengaged)

子どもへの情緒的関与に欠ける。子どもからの心理的距離が強い。あまり多くを語らず、語りは最小限である。子どもに対して冷ややかで拒絶的。感情が抑制されている。

➤ 歪曲型(Distorted)

子どもについて多くを語るが、話にまとまりがなく、一貫性に欠ける。子どもに対して激しく混乱していたり、圧倒されていたりする。(特にネガティブな)感情表現が激しい。

22

まとめ

養育との関連

- ✓ 妊娠期に安定型であった母親は、非関与型や歪曲型であった母親よりも、出産後の母子相互作用場面において、子どもに対してより敏感であったり、ポジティブな情緒的トーンをより多く表出していた。

子どもの発達との関連

- ✓ 妊娠期に安定型であった母親の子どもは、非関与型や歪曲型であった母親の子どもよりも、生後18ヶ月における母親へのアタッチメントがより安定していた。

23

生涯発達の礎としてのアタッチメント

— 剥奪研究と介入研究が含意するもの —

24

Nelson, C.A., Fox, N.A., & Zeanah, C.H. (2014). Romania's Abandoned Children: Deprivation, Brain Development, and the Struggle for Recovery. Harvard University Press.

BEIP (Bucharest Early Intervention Project) の中間的成果

- ・チャウシエスク政権が「残した未だ癒えない深い爪痕」
- ・深刻な環境剥奪にさらされた遺棄児の心身発達のその後
- ・知情意・人格・アタッチメント障害(RAD/DSED)等の指標
- ・身体発育(FTT)・頭囲・脳神経・細胞(e.g. テロメア)等の指標
- ・環境変化(施設→里親)がもたらす影響: ランダム割り当て
- ・環境変化のタイミング・施設生活の長さ等と予後
- ・里子は施設に残った子より発達は良好だが一般児には及ばない
- ・全般的に斉一な遅滞・歪曲というよりは不均一な心身発達 etc.

◇乳児期のアタッチメントの剥奪→殊に自己と社会性発達に長期的ダメージ 25

自己と社会性の力=「非認知」

- 「自己」にかかわる心の性質 (→個性化)
(自分を大切にし、自分を高めていくための力)
「自尊心/自己肯定感」・「自制心」・
「グリット」・「自立心/自律性」 など
- 「社会性」にかかわる心の性質 (→社会化)
(集団の中に溶け込み、人との関係を作り維持していくための力)
「心の理解能力」・「共感性/思いやり」・
「協調性」・「道徳性」・「規範意識」 など
- 両側面に関わる「感情の制御・調節」

26

Heckman, J. J. (2013) Giving kids a fair chance. The MIT Press.

ジェームズ・ヘックマン(労働・教育経済学: 2000年ノーベル経済学賞)

- ・子どもに対する教育投資効果→乳幼児期への投資が最も効果的
- ・就学後の教育の効率性を決めるのは、就学前の子育て・保育の質
- ・乳幼児期への投資は大人になってからの15~17%の利益還元に通じる
- ・ベリ-就学前計画: 乳幼児期の保育が40歳時の経済状態・幸福を分ける
- ・特に恵まれない環境にある子にとって乳幼児期の保育はきわめて重要
- ・それは「認知」以上に「非認知」能力を促すことを通じて生涯発達に影響

◇家庭外の安定した大人との関係→「非認知」=自己と社会性の発達を補償 27

- 「幼児期決定論」の誤謬
- 生涯発達心理学→生涯に亘る発達の可塑性
- 原理的に人は人生のどの時点でも変わり得る
- しかし、加齢とともに発達の可塑性・変化/回復可能性が徐々に減っていくというのも抗えない科学的事実の一つ
- 生涯発達における乳幼児期の重要な意味は、いかなる意味でも揺るがない
- ただし、それは早期教育のような特別な働きかけの有効性ではなく、至極自然な子どもとの関係性(=アタッチメント)の大切さを示唆している

28

- 子どもの発達と教育をめぐる世界的動向
(e.g. OECD諸国の動き)
- 見直されつつある「乳幼児期」の重要性
- 生涯発達の基礎工事: 高度な学校教育も確かな土台の上に積み上げられてこそ益をなす
- 見直されつつある「非認知」の力の大切さ
- Well-beingに至る基礎工事: 「認知」も「非認知」の支えがあってこそ長期・持続的に益をなす
- 「非認知」の中核→自己と社会性の力
- それを育む揺りかごとしてのアタッチメント

29

- マッシュマロ・テスト: ウォルター・ミシェル 1970年~追跡調査
- 幼稚園4歳児を対象
- 「1個、すぐに食べてもいいけど、15分待っていられたら2個あげるね」
- 1/3が待って2個もらう→その後の学業成績や社会的成功を長期的に予測
- 幼児期の「IQ」(認知)以上に「自制心」(非認知)が重要
- 「異時点間の選択のジレンマ」(アリとキリギリス) / 「自他間の選択のジレンマ」
- それは社会性にも強く影響をもたらす: 自己利益中心にばかり行動すると仲間の信用を失って長期的には集団の中で幸せになれない(「将来の影」)

30

- OECDレポート(2015)が掲げる「非認知」
"Skills for Social Progress : The Power of Social Emotional Skills"
- 「認知」「非認知」スキルが予測する多様な心理社会的適応
- 所得は「認知」だけでは説明され得ない→「非認知」の重要性
- 「非認知」→「認知」の因果関係は"robust":その逆因果は×
- ターゲットとする「非認知」=「社会情緒的」スキル
- 個人および社会における生産性への寄与が期待されるもの・成長可能性が見込まれるもの・測定可能なもの
- 「長期的目標の達成」/「他者との協働」/「感情の管理」
- 「スキルがスキルを生む」(Skills beget Skills)
- 殊に社会情緒的スキルの土台を就学前期に築くことの重要性
→ "Starting Strong" 「人生の始まりこそ力強く」

31

- 国立教育政策研究所・プロジェクト研究
- 非認知的(社会情緒的)能力の発達と科学的検討手法についての研究
http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-2-1_a.pdf
- 社会情緒的コンピテンス調査に係る分析結果報告書
http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h30/h300327-01.pdf

32

アタッチメントと心の発達

33

生涯発達の鍵となるアタッチメント

- 子どもは容易に怖がる・不安がる存在
- そして泣きながら身近な誰かにくっこうとする
- くっついて安全感・安心感に浸ろうとする
= アタッチメント
- 一日に何回も繰り返される至極当たり前のこと
- しかし、これがいかに確実に安定して経験できるかが、生涯に亘る心身の健康な発達の鍵になる

34

- *Attachment* = 何らかの危急時あるいは危機が予期された時に生じる恐れや不安等のネガティブな情動を、特定他者への近接性の確保を通して制御・調整しようとする行為傾向(→心理行動/神経生理的制御機構)
- 一者の情動の崩れを二者の関係性によって制御
外界と内界の間にあつて「緩衝帯」として機能
→ 特定他者への近接を通じた「安心感」の回復・維持
→ 保護してもらえることへの確かな「見通し」
→ 「見通し」に支えられての自発的「探索」
→ 「一人ではいられる能力」=自律性の獲得・拡張

「安心感の輪」(circle of security)

35

- 安心感の輪(Circle of Security)
安全な避難所 / 安心の基地としての養育者
...→ 危機との遭遇
→ ネガティブな情動経験(恐れ・不安・欲求不満等)
→ 「安全な避難所」への近接(アタッチメント)
→ ネガティブな情動の調節 / 情緒的燃料補給
→ 「安心の基地」からの探索・遊び
→ 危機との遭遇...
- この輪がいかに自然にかつ確実に機能し得るか
→ 子どもの健やかな発達 / 人の心身の適応性
- 子どもの発達=「安心感の輪」の拡大
「一人ではいられる」時間(自律性)の拡張

36

アタッチメントと心の発達

アタッチメントの二重過程

- 感情の調節・立て直し
子どもの崩れた感情をなだめ、回復させる
→ 自他への基本的信頼・自律性・心のたくましさ 等
- 感情の調律・映し出し
子どもの感情に寄り添い、映し出してあげる
→ 心の理解能力・共感性・思いやり・自己概念 等

37

基本的信頼感と自律性・たくましさ

- 特定の他者に対するくっつき(近接)を通して、安全の感覚を回復・維持し、他者は基本的に誰でも自分を確実に保護してくれる、自分は確実に保護してもらえ、愛してもらえという基本的信頼感=「愛の理論」を得る
- 子は探索する中で自然に適度なネガティブ感情を経験→自ら何とかしたいと思い、能動的にシグナルを送ることで他者を動かし感情を立て直す→それが自分にはできるという自信)→自律性・自己効力感・心のたくましさ

38

心的理解能力・共感性・自己概念等

- 養育者は、子どもの情動をただ立て直すだけでなく、自らが「社会的な鏡」となり(つい子どもと同じような表情や声の調子になるなどして)、子どもの様々な心的状態に調律し、それを映し出す
- ミラーニューロンの関与?
- また、子どもの心身状態に合致した発話を伴わせる→子どもは自身の心身状態に適切なラベルを貼りつけ、理解→さらに今度はそれを他者にもあてはめることで他者の心も理解
- 自身が共感され受容され映し出される中で心的理解や共感性や自己概念・意識などが発達する

39

- 安定したアタッチメント関係の中で、子どもは感情の制御(立て直し)と感情の調律・映し出し・ラベリング(寄り添い)を経験する

- その確かな経験は、自己と社会性に関わる多様な心的基盤、具体的には、子どもの自他に対する基本的信頼感および自律性・自己効力感やレジリエンス、さらには自他の心身状態の的確な理解や共感性・向社会性などの発達に深く関わる

40

アタッチメントと脳・身体の発達

41

アタッチメントと脳・身体の発達

- 恐れの状態→逃げるための緊急反応
- 心臓・血管・内臓・脳神経系など、身体各所に大きな負荷→効率よく元通りにされないこと形成途上の子どもの脳や身体の発達にダメージ
- 「隠れた影響経路」(→hidden trauma : e.g. 被虐待児等)
アタッチメントが神経-生理学的側面に及ぼす影響
e.g. HPA軸 (Hypothalamic-Pituitary-Adrenal axis)[視床下部-脳下垂体-副腎皮質系]
SAM軸 (Sympathetic-Adrenal-Medullary axis)[視床下部-交感神経-副腎髄質系]
海馬、左半球、ミラーニューロン... / 心血管・内臓・内分泌系...
ストレスセンサー / 恒常性 / 概日リズム / 免疫機能 etc.
- 12・18カ月のアタッチメント→32歳時の身体的健康(Puig et al. 2013)
→成人期において幼少期の不安定群は安定群の4倍の身体症状を訴える

42

養育者の関わり方から見る アタッチメントの個人差と障害

43

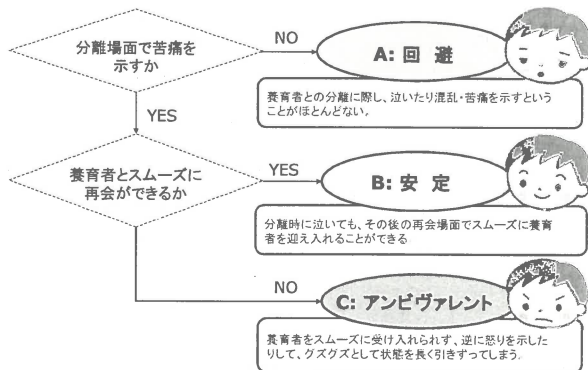
- 子どもは養育者を選べない
- 養育者の関わり方に応じてくつき方を調整
アタッチメントのタイプ=環境に対する適応方略
- ストレンジ・シチュエーション法
分離時の苦痛+再会時の怒り

A(回避), B(安定), C(アンビヴァレント)
organized ↔ D(disorganized: 無秩序)

D安定 D不安定

44

ストレージ・シチュエーション法



- 臨床的視座からのアプローチ
→アタッチメント障害

• **DSM-5**

RAD: 反応性アタッチメント障害

Reactive Attachment Disorder

DSED: 脱抑制性社交障害

Disinhibited Social Engagement Disorder

49

• **RAD: 反応性アタッチメント障害**

- (A) 行動抑制・情動的引きこもり
心的苦痛時でも養育者に慰撫を求めない、慰撫に反応しない
- (B) 持続的な社会的・情動的混乱: 以下の少なくとも2つ
① 他者への社会・情動的反応の乏しさ ② ポジティブ情動の少なさ
③ 説明不可能ないらだち・悲しみ・恐れ(非脅威的相互作用でも)
- (C) 極端に不適切な養育状況: 以下の少なくとも1つ
① 社会的ネグレクト・剥奪(基本的な情動的欲求の持続的無視)
② 安定したアタッチメントを阻む主要な養育者の頻繁な入れ替わり
③ 対象選択を阻む異常な環境(子に対して大人の数が極端に少ない施設等)
- (D) 基準(C)の養育が行動障害の原因をなす
- (E) 自閉症スペクトラム障害とは異質
- (F) 5歳よりも前に顕在 (G) 最低9か月以上の発達年齢

50

• **DSED: 脱抑制性社交障害**

- (A) 見知らぬ大人への近接・相互作用: 以下の少なくとも2つ
① 見知らぬ大人への近接・相互作用に抑制・遠慮がない
② 過剰になれなれしい言語的・身体的行動
③ 探索で離れて行く際に大人を振り返らない
④ 見知らぬ他者から離れるのに躊躇が認められない
- (B) 基準(A)の行動が衝動性(e.g. ADHD)だけでは説明不可
- (C) 極端に不適切な養育状況: 以下の少なくとも1つ
① 社会的ネグレクト・剥奪(基本的な情動的欲求の持続的無視)
② 安定したアタッチメントを阻む主要な養育者の頻繁な入れ替わり
③ 対象選択を阻む異常な環境(子に対して大人の数が極端に少ない施設等)
- (D) 基準(C)の養育が行動障害の原因をなす
- (E) 最低9か月以上の発達年齢

51

Zeanahらによる代案

- (A) 非愛着
情緒的撤退 / 無差別的社交性 (→ルーマニアの孤児)
- (B) 安心基地のゆがみ
向こう見ず(自傷・攻撃) / 探索抑制 / 過剰応諾 / 役割の逆転
- (C) 一時的な愛着行動のくずれ

52

- 向こう見ず型(自己危険): ネグレクト・暴力的環境・愛情の奪い合いの状況など
- 抑制型: 養育者の過敏性・トラウマ的出来事の経験など
- 過剰応諾型: 厳しい懲罰・親による愛情撤退の脅しなど
- 役割逆転: 抑うつや虐待、親の異常な関わりなど(Dタイプとの関連性)

53

• **アタッチメントと適応(Borris & Zeanah, 1999)**

適応的

Level 1: Secure(B)

Level 2: Insecure(A / C)

Level 3: Disorganized(D)

Level 4: Secure-Base Distorted

Level 5: Non-Attachment

非適応的

54

アタッチメントから問題形成への潜在的影響

(Deklyen & Greenberg, 2008)

- ①情動制御プロセスへのネガティブな影響(それに関わる生理学的機序の発達不全)
- ②特異な行動パターンの形成(例えば執拗な泣きや不従順など)
- ③社会的認知や対人的情報処理に歪んだバイアス(内的作業モデルの組織化の歪曲)
- ④他者との社会的関わりへの動機づけの低下(結果的に自ら社会化の機会を遠ざける)

55

アタッチメントと 不適切な養育・虐待

56

- 「否認」(“not-me”の心理)
- 「侵入的想起」(フラッシュバック)

- 対人関係のゆがみ・トラブル
- 共感性・他者理解の問題
- 関係性の再演(自傷・再被害化等)・ためし行為

- 過覚醒・感情制御不全
- 自己(の心の状態の)理解の問題
- 有効な対処行動の不足

etc.

57

• 育児の質(虐待)に関わる要因

• 養育者自身の要因

生育歴・性格・心身の病・障害・非血縁・年齢・・・

• 子どもに関わる要因

気質・病気・遅滞・障害・容貌・性別・・・

• 養育を取り巻く環境の要因

経済/就業(貧困)・家族/配偶関係・結婚状態・
ストレス・サポート(無職・シングルリスク)・・・

58

アタッチメント理論から見る虐待

- 虐待に対する発達臨床的なスタンス
- 「**児童虐待**」=「**関係性の障害・混乱**」
個々の虐待行為以上にその背景としてある関係性全般の特質に着目すべき
(“因”としての虐待行為 / “地”としての関係性)
- 虐待行為に着目するにしても
その“累積性”およびその“一般化された形での内在化”に焦点化
(一回性の外傷・反復性の外傷・累積性の外傷)
→大半のケースは累積的な関わりでの失敗による(hidden trauma)

59

累積的な関わりでの失敗とトラウマ

- 受けた傷そのもの+それが癒されないことによる傷
- あるネガティブな出来事がトラウマ(心身の「傷」)になるか否かは、その出来事によるダメージ以上に、そのダメージあるいはそれによって生じた感情状態の乱れがその後、長く適切に制御されないままになる累積的な関わりでの失敗によるところが大きい
- 感情の被制御不全→2つの経路(「高次」「隠れた」)を介してその後の発達過程に長期的影響を及ぼす
- 「立て直し」の失敗→自他に対する根源的不信感
- 「映し出し」の失敗→自他の心の理解能力の発達不全
→次なるトラウマに対する脆弱性

60

- 主要な養育者との間で繰り返された関係性
→その後の個人特有の「対人関係テンプレート」
- 主要な養育者によってなされたことを、基本的に、子どもは他の様々な対象にも期待し、行動する
- 被虐待児における社会的情報処理の偏り
- 他者の怒りへの過敏性(悲しみ/苦痛への相対的鈍感性)
- 真顔を怒りと誤認識する傾向 etc.
→悪意のないところに悪意を読み取りがち
→対人関係トラブル・関係性の再演・再被害化

61

- 感情の「包容」/「α機能」(e.g. Bion)
→乳児が自らの情動に翻弄されないように、それを包容し、それに意味を与えながら(=表情や言葉を通して、子どもの心身の内部で生じていることを適切に映し出しながら)慰める
- 被虐待児:養育者の「α機能」の希薄さが、自己の心や身体状態の覚知・言語化の困難さを招来しがち
- 現に不適切な養育にさらされる中で「β要素」(身体内部で生じていることそのもの)は潜在的に人一倍ネガティブなものになる可能性。にもかかわらず、それを「つらい」と覚知し言語化できない→自らリスク回避的行動をとることができなかつたり、他者から効率的に援助を引き出すことが難しくなつたりする
→二重三重のトラウマに巻き込まれやすくなる

62

アタッチメントの生涯発達と世代間伝達

63

アタッチメントの生涯発達

- Adult Attachmentの概念化・測定
- アタッチメントの生涯発達概念としての妥当性
- 乳幼児期～老年期において一貫して、アタッチメントは心身の適応性に深く関わり、同時にその喪失は心身に甚大なダメージを及ぼす
- ただし、アタッチメントの連続性に関しては、その見方を部分的に修正する必要が叫ばれる
- 成人アタッチメント研究の展開
加齢→回避傾向の増? 役割逆転と再組織化
他行動システム(性・ケア・探索)との関連 etc.

64

愛着対象としての仲間・友人・異性

- Hazan(1994):15歳～ 全4要素で友人選択
近接欲求・分離抵抗・安全基地・避難所
主要な愛着対象として8割が異性を挙げる
sexualityとattachmentの重なりとずれ
- アタッチメントの個人差と友人・異性関係の構築には一貫した関係 (e.g. M安定-F安定:M回避-F両価)
友人関係・異性関係に一定したパターン(異質要素の排除→変化の契機減少)
- 個人が主観的に認知する愛着対象と実際に機能する愛着対象の乖離(愛着と関係疎外への恐れ→見捨てられ不安の境界はあいまい:虐待との類似性)

65

- アタッチメント→後の様々な発達を予測
- 子ども期の被養育経験→アタッチメント表象(鑄型:テンプレート)として取り込まれる
- アタッチメントに関する内的作業モデル
→自己と他者に関する主観的な思い込み
- モデルの固定性→自己確証プロセス
- 思い込みが正当であるとさらに思いこめるように対人関係を操作
→同じような関係を繰り返すことに (e.g. いじめ)

66

● いじめの問題

- いじめという行為を止めさせる・環境を変える
→ある一部の子どもには有益
- しかし、いじめる・いじめられる経験は環境を変えても繰り返されることがしばしばある
- いじめる・いじめられるのが当たり前という思いこみの頑強さ(→Sroufeの研究)
- いじめ-いじめられるという対人関係の持ち方→不快ではあっても慣れ親しんだもの

67

● アタッチメントのモデルと社会的悪循環(転がる雪玉現象)の絡み合いのこわさ

- 転がる雪玉:最初は小さな問題でも1回転がりは始めると別種の問題を吸い取り増幅
- 幼児期のつまずき→大人になってからの問題:決定論的に線で結ばれていると捉えられがちしかし、実態は点でつながっている
- 親の離婚→環境の激変→一時的施設入所→原家族に戻る→家庭からの逃避願望→早い妊娠・結婚→乏しいサポート・不和→離婚→養育の失敗) など

68

● 生涯に亘る異型的 / 同型的 連続性

- 成人愛着面接(AAI)
拒絶(Ds), 自律安定(F), とらわれ(E), 未解決(U)
- 縦断研究: SSP (infancy) - AAI (adulthood)
→Waters et al.(1995): 3way-64%, 2-way-72%
Fralely(2002): 緩やかな相関(.30), サンプルに依存
- Disorganizationの時間的連続性→e.g. Carlson(1998)
- Earned Secure / Continuous Secure
- アタッチメントの世代間伝達 (cf. 虐待の世代間伝達)
- 親のAAI - 子どものSSP
→van IJzendoorn (1995): 4way-63%, 3way-70%
数井・遠藤他(2000), Behrens et al.(2007): 日本人母子
- Transmission Block / Transmission Gap

69

● 自律型: (→SSPのBに相当)

- 理解可能なストーリーを首尾一貫した形で語る。虐待のような否定的な経験があっても、それをアタッチメント関係の肯定的な面と併せてバランスよく語る。
- アタッチメント軽視型: (→SSPのAに相当)
● 親との経験を理想化するが、それを裏付ける具体的エピソードを挙げる事ができなかったり、むしろそれとひどく矛盾するエピソードを語ったりする。
- とらわれ型: (→SSPのCに相当)
● 首尾一貫した形で語る事ができず、曖昧なことを多用、話は冗長でまとまりがなく、過去の経験を語りながらしばしば情動的に混乱してしまうところがある。アタッチメントにまつわる特定の記憶、特に辛かった出来事を多く想起し、時にそれが今生じているかのように強い怒りや恐れを表現することもある。
- 未解決型: (→SSPのDに相当)
● 話の内容にそれなりに一貫性があるが、ある特定の外傷体験について語る時に「魔術的な」解釈や非現実的な思いこみが認められる(ある特定の事柄に対して選択的にメタ認知が崩れる)。

70

● 拒絶・回避型(愛着軽視型)

- 自立・独立や自己充足・自己完結が重要であり、他の誰かに依存したり、依存されたりすることは好まない。感情を抑え隠す傾向があり、自ら拒絶することで他者との距離を保とうとする。
- 自律・安定型
他者と親密な関係になることが比較的容易であり、誰かを頼りにしたり、誰かから頼りにされることに心地よさを感じる。
- とらわれ型(不安・アンビバレント型)
パートナーに非常に高い自身との親密性や自身に対する承認、応答性を求め、パートナーが自分と同じようには望んでいないことに不安を感じる(見捨てられ不安を感じやすい)。
- 恐れ・回避型(未解決型)
他者との親密な関係を求めているものの、近くなりすぎたら相手から傷つけられるのではないかと恐れや不安があり、相手を完全に信頼したり、相手に依存したりすることが難しい。

71

- 「ゆるやかな時間的連続性」の証左は確か
- 連続性は環境の相対的安定性によるのでは?
- 「鑄型」仮説は一般サンプルでは説明力が低い
- 原理的には環境の変化に応じてアタッチメントは変質する(←"allocare"に対する適応)?
- モノトロピー・階層的組織化の原理
→複数他者との関わりを前提とした
統合的 / 独立並行的組織化の原理
(e.g. 早期の保育者とのアタッチメント→集団状況での適応性)
- ただし、臨床群では「鑄型」仮説の有効性大

72

悪しき環を断つもの

- **Earned Secure** (retrospective / prospective)
過去に不遇な経験を有しながら現在、安定
- 当初: 抑うつとの関連性が指摘されるが、現在では Continuous Secureと同等とされる(Roisman et al., 2002)
- 過去の内的作業モデルと異質な対人関係
特に異性や配偶者との持続的関係の重要性
Self-verification processに抗する経験
(cf. Crowell et al., 2002)
- 他に内省的自己(reflective self)の重要性を指摘する向きもあり(Fonagy, 2003)

73

施設養護の課題と可能性

74

- 現今の実証知見→子どもは多様な他者による“alloparenting”を受け容れて、それを親子関係とは異なるもう一つの発達の基盤となし得る→それだけに“alloparenting”の質が問われる
- しかし、子どもにとっての「もう一つの社会的世界」は「もう一つの家庭」であるべきなのか？
- 世界的動向: 施設養護→家庭的養護
しかし、日本は今なお施設養護中心
これを単なる「遅れ」と見なすことは不適當
歴史・子ども観・養育文化などの多様な要因の帰結
- 問われるべきは施設養護「内」の課題と可能性

75

- 家庭的養護
→new forced relationship
- 先行する関係性に抗うような異質な対人経験を持続的にもたらし得るメリットは大→IWMの修正
- しかし、子ども側の要因に巻き込まれた場合のデメリットも大(→e.g. ルーマニアの孤児のその後)
- (小グループホームなどの場合)スタッフの離職等によって環境の一貫性が損なわれやすい
- **Typical process**
“forced relationship”→IWM→“selective relationship”
自己確認プロセス→変化可能性の漸次的低下=人格の連続性

76

- 施設養護(+治療)
→semi-forced/selective relationship
- 複数対象ゆえの予測可能性の低さ→情緒的混乱・felt securityの揺らぎ→デメリット
- “congeniality”(相性)に従った対象選択・代替的な関係性保障・専門的治療・リソースとしてのpeer関係→safety netの多層性
- **“earned secure”**からの示唆:
 - 変化機会としての「結婚」(semi-selective/forced): パートナー選択は多様な要因によって成立→アタッチメント以外の要因による結びつきがアタッチメント上の変化を招来し得る

77

- **“multiple care-giving”**の問題性
“multiple”そのものに起因する訳では必ずしもない
相対的に「予測可能性」が低下しがちなところに主因
「いつも誰でも」「いつでも誰かは」→不安要素が大
- 最も重要なことは、子どもにとって確実に安全性の見通しが立つこと、そしてそれが大きくは裏切られないこと、裏切られた場合は素早く修復されること
- 「いつもあの人に」は無理でも、「この時ならばあの人に」という高度な予測可能性の実現に力点を置くべき
- スタッフの哲学や接し方における集団としての一貫性
- **network-security** with warm emotional climate

78

- 集団状況に適した“sensitivity” のあり方

- 「養護環境に家庭的雰囲気」→確かに一つの課題ではあるが、集団状況で機能する子どもに対するケアは親子二者間で機能するケアとは元来、異質なものである可能性 (e.g. Ahnert et al., 2006)

- **Dyad-related sensitivity (DS)**

個の欲求に対する反応の素早さ的確さ

- **Group-related sensitivity (GS)**

集団全体に対する共感性・許容性・構造化 etc.

<→emotional availabilityに近似>

79

- 子どもは複数他者との関係の中で育つ。そこには重みの序列があるが、子どもは状況に応じて異なる他者をアタッチメント対象にし得る

- 家庭「外」のアタッチメントは時に家庭「内」のアタッチメントを補償し得る

- 養護者とのアタッチメントの質は特に子どものその後の集団生活における適応を予測する

- 集団状況では集団的敏感性の高さが個々の子どもと養護者の関係性を良好なものにする

- 「いつでも誰かが」よりは徹底して「今はこの人が」ケアするという体制を築くことが有効である

81

- 「すべてをやりこなすことはできない」現実
それをただデメリットと悲観的に捉えるのではなく、それをメリットに変える創意や実践

- **“imperfect”→“good-enough”**
(e.g. mild frustration→resilience:「ストレス予防接種」)

- Tronick(2007): 機能的な関係性においては attunementとmisattunementが半々程度

- 子どもは大人の少々の失敗をdiscountする
(目標修正的パートナーシップを築き得る発達状態が前提)

- **“misattunement→repair”**の重要性
→子どもを養育の“co-constructor”とする

83

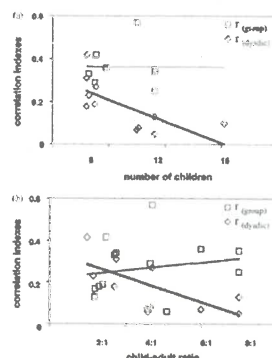


Figure 1. (a) Correlations between measures of child-care provider attachment security and care provider sensitivity (group-related vs. dyad-related) as related to group size. (b) Correlations between measures of indexes of child-care provider attachment security and care provider sensitivity (group-related vs. dyad-related) as related to child-adult ratio.

GSの高さ→子どもと保育者のアタッチメントの安定性に寄与→しかも、それは集団サイズに左右されない

GS高の保育者のもとにいる複数の子ども→総じてアタッチメントが安定

全体としてGSが高い集団状況→スタッフの異動等による負の影響が少

子どもは集団状況で二者状況とは異なる形でfelt securityを求める

Ahnert, L., Fisoart, M., & Lamb, M.E. (2006). Security of children's relationships with nonparental care providers: A meta-analysis. *Child Development*, 74, 664-679.

80

- 先行剥奪の歴史に対する配慮・洞察

- PTSD・情動制御不全・生活/行動上の問題・発達遅滞・実親に対する歪んだ“loyalty”
- 内的作業モデル→関係回避・自己確認傾向
- 養護感情・養護行動の誘発性の低さ (mind-mindednessの不活性)

- 潜在的ニーズやシグナルの読み取りにくさ
e.g. 依存的な行動を無視されたり懲罰を受けたりした過去→シグナルの抑圧→独立性や自律性と錯認されかねない

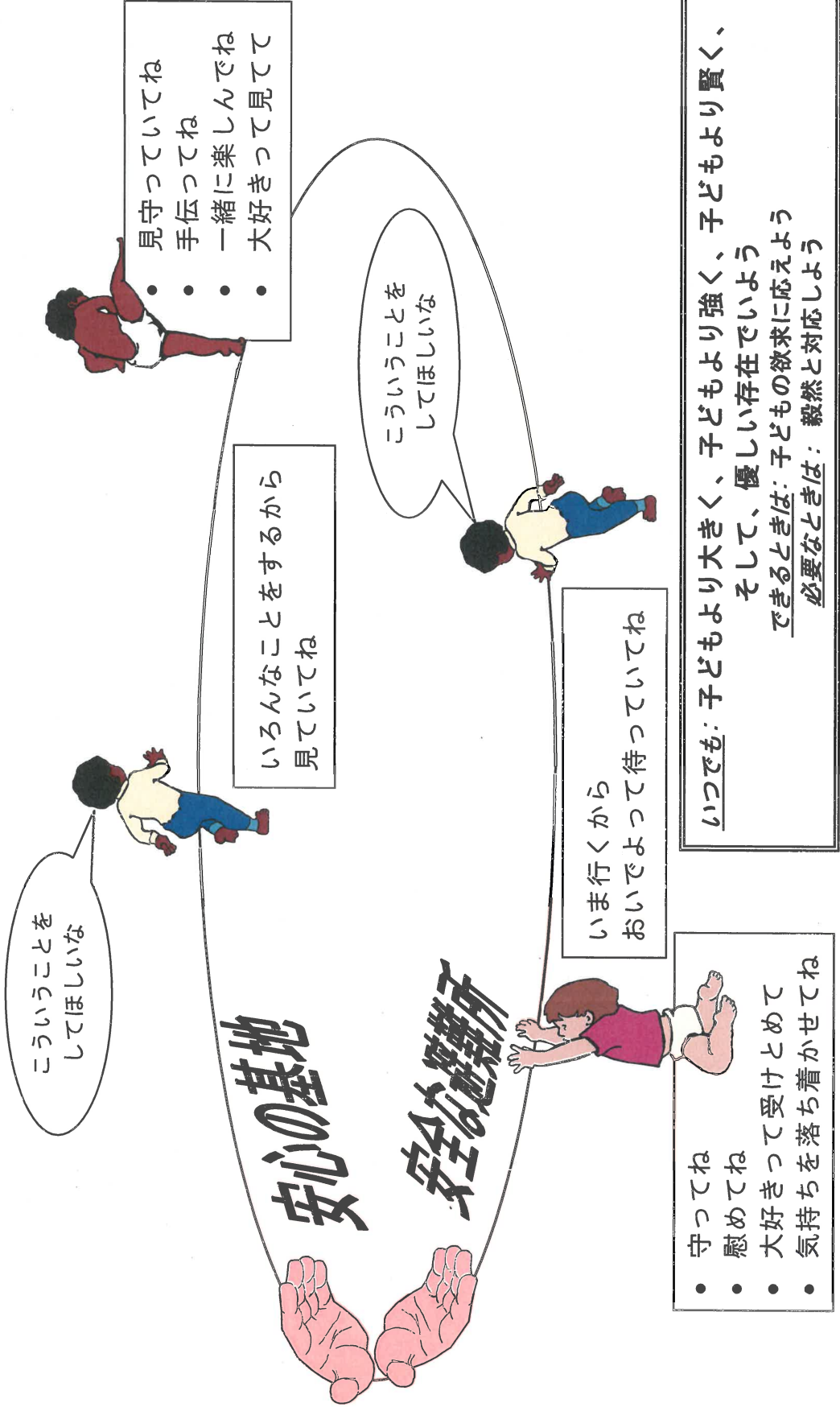
- 外面に左右されないニーズの見極めと対処

82

安心感の輪

Circle of Security®

子どもの欲求に目を向けよう



各アタッチメントタイプの行動特徴と養育者の関わり方(sensitivity)

	ストレンジ・シチュエーションでの子どもの行動特徴	養育者の日常の関わり方
<p>Aタイプ (回避型)</p>	<p>養育者との分離に際し、泣いたり混乱を示すということがほとんどない。再会時には、養育者から目をそらしたり、明らかに養育者を避けようとしたりする行動が見られる。養育者が抱っこしようとしても子どもの方から抱きつくことはなく、養育者が抱っこするのをやめるとそれに対して抵抗を示したりしない。養育者を安全基地として(養育者と玩具などの間を行きつ戻りつしながら)実験室内の探索を行うことがあまり見られない(養育者とは関わりなく行動することが相対的に多い)。</p>	<p>全般的に子どもの動きかけに拒否的にふるまうことが多く、他のタイプの養育者と比較して、子どもと対面しても微笑むことや身体接触することが少ない。子どもが苦痛を示していたりすると、かえってそれを嫌がり、子どもを遠ざけてしまうような場合もある。また、子どもの行動を強く統制しようとする働きかけが多く見られる。</p>
<p>Bタイプ (安定型)</p>	<p>分離時に多少の泣きや混乱を示すが、養育者との再会時には積極的に身体接触を求め、容易に静穏化する。実験全般にわたって養育者や実験者に肯定的感情や態度を見せることが多く、養育者との分離時にも実験者からの慰めを受け入れることができる。また、養育者を安全基地として、積極的に探索活動を行うことができる。</p>	<p>子どもの欲求や状態の変化などに相対的に敏感であり、子どもに対して過剰なあるいは無理な働きかけをすることが少ない。また、子どもとの相互交渉は、全般的に調和的かつ円滑であり、遊びや身体接触を楽しんでいる様子が随所にうかがえる。</p>
<p>Cタイプ (アンビヴァレント型)</p>	<p>分離時に非常に強い不安や混乱を示す。再会時には養育者に身体接触を求めていくが、その一方で怒りながら養育者を激しくたたいたりする(近接と怒りに満ちた抵抗という両面的な側面が認められる)。全般的に行動が不安定で随所に用心深い態度が見られ、養育者を安全基地として、安心して探索活動を行うことがあまりできない(養育者に執拗にくっついていようとする相対的に多い)。</p>	<p>子どもが送出してくる各種愛着のシグナルに対する敏感さが相対的に低く、子どもの行動や感情状態を適切に調整することがやや不得手である。子どもとの間で肯定的な相互交渉を持つことも少なくはないが、それは子どもの欲求に応じたものというよりも養育者の気分や都合に合わせてものであることが相対的に多い。結果的に、子どもが同じことをしても、それに対する反応が一貫性を欠くとか、応答のタイムラグが微妙にずれるといったことが多くなる。</p>
<p>Dタイプ (無秩序・無方向型)</p>	<p>近接と回避という本来ならば両立しない行動が同時に(例えば顔をそむけながら養育者に近づこうとする)あるいは継時的に(例えば養育者にしがみついたかと思つとすぐに床に倒れ込んだりする)見られる。また、不自然でぎこちない動きを示したり、タイムミングのずれた場違いな行動や表情を見せたりする。さらに、突然すくんでしまつたりする表情を浮かべつとじつと固まつて動かなくなつたりするようになることがある。総じてどこへ行きたいのか、何をしたいのかを読みとりづらいう。時折、養育者の存在におびえているような素振りを見せることがあり、むしろ初めて出会う実験者等により自然で親しげな態度を取るようなことも少なくない。</p>	<p>Dタイプの子どもの養育者の特質に関する直接的な証左は少ないが、Dタイプが被虐待児や抑うつなど感情障害の親を持つ子どもに非常に多く認められることから以下のような養育者像が推察されている。(多くは外傷体験など心理的に未解決の問題を抱え)精神的に不安定なところがあり、突発的に表情や声あるいは言動一般に変調を来し、パニックに陥るようなことがある。言い換えれば子どもをひどくおびえさせるような行動を示すことが相対的に多く、時に、通常一般では考えられないような(虐待行為を含めた)不適切な養育を施すこともある。</p>